



第 24 回例会

2023. 2. 8

今年度
スローガン
インスパイア

いつもわが身を鼓舞し、仲間の行動を激励し、人に感銘を与える

会員 67 名中	41 名出席	出席率 61.19%
修正 48 名出席	出席率 71.64%	メイクアップ 7 名

WEBSITE!

イマジン
ロータリー

例会場 クーラクーリアンテナサンパレス 福島市上町 4-30

開催日 毎週水曜日 12時30分~

会長 渡邊 正義

幹事 穴戸 隆司

会長挨拶

渡邊正義 会長



先週は第2回のオープン例会という事でお世話様でした。また、ロータリーの友の時間では高橋パスト会長の貴重なお話を頂き大変有難うございました。鈴木洋子さんのスピーチには大変感動しました。大震災から11年たち間もなく12年になろうとしています。その時の記憶、思い出したくない体験、私達には理解しえない苦しい体験をお話しして頂きました。どん底に落ちてそこから這い上がる素晴らしい気力です。女性のしなやかさでしょうか、とても私には真似できないことです。私事ですが、私の娘の長女がちょうど2011年3月2日に生まれまして産後の養生の為実家で休んでいた時、ちょうど家内も留守でして長女は娘を抱いて右往左往していたそうです。幸いすぐ裏が家内の実家だったのでそこに逃げたそうです。避難しようかどうか迷いましたが避難はせず福島にいました。娘家族も5月位まで我が家で避難生活を送っていました。あの頃は毎日のように余震があり、気が抜けない日々が続きました。仕事の方も気がかりでしたが除染の仕事を頼まれ一息つきました。建設業でも一息ついたのではないのでしょうか。震災前までは青息吐息の建設業界でした。首の皮一枚でどうにか踏ん張っているところが半数近くいたのではないのでしょうか。除染事業が始まって一躍業界にはぎわい始め、この震災は業界にとって言い方は悪いですがカンフル剤になったのではないのでしょうか。一気に蘇りました。私も大いに悩みました、人の不幸の上に立って事業が成り立っているという事に対してですね。これからは一層社会の役に立つことをしようと心に誓いました。それがロータリーに再入会した大きな理由です。

今日はこの後、藤橋会員、國井会員のスピーチがあります。御二方宜しくお願い致します。

会員スピーチ

「不変と変革・企業倒産に学ぶ」 藤橋 進一郎 会員



本日、ここでスピーチの時間をいただきました事にお礼申し上げますと同時に、与えられた時間内では話し尽くせない事を前もってお伝えしておきます。

当社は、明治18年の創業で、今年でちょうど138年を迎えることになったわけですが、現在は5代目の息子に全権を委任し、時代に対応した業種業態を弱小企業ながら形成しております。ここで少し当社の歴史を紹介させていただきます。創立当初は、当時日和田から来た初代が鋳戻しだったものですから、鍋鎌の鋳掛けとして鋳物工場を建設いたしました。そして、それから鍋釜の製作に取りかかったと言われられております。2代目の祖父には、当時兄弟8人おりまして、その中の5人が兄弟別れをしたと言います。その当時、国産機械がない時代に、海外（フランス、イギリス、アメリカ、ドイツ）から輸入

しまして、そこから始まったと伝えています。当時は、また、蒸気動力（モーター）も無かった時代で、蒸気で機械を動かしたことも伝えられております。そして、徐々にモーターが入ってきた時には、今は国道13号になっておりますが、曾根田町のど真ん中に工場3棟が建っていました。その中にはやはり外国の古い機械が入っておりまして、上にメインのシャフトが入って、そこからベルトで全部の機械を回したという経緯です。そんな時代をずっと進めてまいりまして、当時、藤橋鉄工所の主力の製品は、織物機械、それから時代とともに、腕用ポンプ（手でガッチャンガッチャン押して水を出すポンプ）、それから、荷車のようにエンジンをつけて、引っ張り出して火事場に持って行って消防する、それでは足りないということで、当時、まだ、国産自動車のない時代に、アメリカのT型フォードを輸入して、それをポンプ車に改造したという経緯がございます。それを東北一円に出荷しました。まだ、私が小さい子供の頃、これを1台だけは見たことがございます。そんな事業をやっていきながら、2代目の長男と兄弟4人が、米沢、鶴岡、常陸、川口、そしてうち（福島）と、点でバラバラに分かれてしまいました。

ここから、私の言う「不変と変革、そして企業倒産に学ぶ」という部分です。1つには私の父が戦争に取られたという経緯もありますが、2代目でそういう風にバラバラになって残ったのが、曾根田にあった時の藤橋ポンプ製作所です。弟がそれを継ぐということで、3棟あった工場の2棟半を弟に預けて、職人も40人いたんですが、全部弟が持って行きました。うちの父には歯車だけを残して、1人で昭和27年に今の藤橋歯車鉄工所を立ち上げたという経緯です。時間の関係でちょっと話を飛ばしますが、この辺では、私が鉄鋼組合の理事長をやった時にもそうなんですが、倒産企業あるいは廃業がかなり出てきております。ここでは何が一番大きな問題であるかということ、1つには会社における過剰投資、取引先からの受注減、あとは、兄弟企業の分裂、加えて私もだいぶ経験しておりますが不渡手形です。皆さんの工場でも、今はどういう風になっているのか不明ですが、我々の製造業では、当時、ほとんど手形決済が多かった。手形で今やっている仕事を翌月支払ということで、4ヶ月とか5ヶ月とか続き、手形を4枚か5枚持っている。そうすると月に100万ずつやっても500万は寝せるという事で、それで、間に合わない時は、銀行で割るといようなことをやっておりました。そういったことで私も不渡手形を3度ほど頂戴しております。

そういった厳しい環境の中での製造業を、今まで生き抜いてきたわけでございますが、現時点でも電気料金、素材そのものも料金がすごく上がっていて、業界を見ますと非常に厳しい状況にあります。そんな中でも今、皆さんの机の上に置いてあります資料が、私が昔書かせたものです。このような状況でも、私の企業に対する、会社に対する思い、五感で感じる物作り、あるいは、社員と価値観を共にして始めて良い物ができるといものが、私の1つの大きな信念でございます。

机に置いたもう1枚の写真をご覧ください。これは大正時代の写真で、ここでは新たな工場、鋳物工場2棟を建てました。今のマックスの駐車場に、大正末期、昭和の初期に私の親父が作ったものです。これで、設備投資をし過ぎたということで大赤字を出して、言っていないものかわかりませんが、西方さんがその土地を全部買い上げてくれて、今まで生き延びたという状況です。現実的にはそういった苦難な道乗り越えて、業種業態を少しずつ変えながらやってきて、現在は特化した形で歯車製造業をやってどうにか生き延びている。取引先としては、秋田、それから神奈川、大阪、いろんなところとやっております。

時間が無くなりましたので、最後になりますが、この度の叙勲拝受いたしました件につきましては、多くの団体組織の中で、次世代の製造業に関わる地域社会で、中小企業の再構築のため、色々な場で訴え続けて、少しでも実のあるものにしてきたということで、機会がありましたら、改めてこれらの話をさせていただきたいと思っております。短い時間で支離滅裂になり、申し訳ありませんでしたが、ご清聴ありがとうございました。



今日は刀を指して来ました。刀の話は後でちょっとしますけど、許可証と登録書を持参しました。会長にも許可頂いていますので、真剣を持参しております。

私がどうして居合道を始めようになったかと言いますと、南クラブの元会員であります小宅淳さんの紹介で、15年前に始めるようになりました。小宅さんは高齢でございますが、今でも週2~3回、門弟の指導に当たっています。また、私は日本剣道連盟の居合道部会に所属しております。剣道連盟と言いますと剣道だけだとお感じだと思いますが、剣道連盟は、剣道、居合道、杖堂、長刀、この4つの武道で成り立っております。私の流派は、無双直伝英信流。あまり聞いたことない流派だと思いますが、これは西の方では大きな流派です。今、一番大きな流派は、武双新伝流ですが、その次に続く流派でございます。これは、四国土佐藩の御留(おとめ)流ということで、山之内内容堂という方が組織したということです。

私は居合道始めて15年で5段です。15年で5段というのはおかしい思う方もいるかもしれませんが、居合道の昇段には時間がかかります。まず6ヶ月稽古すると1級を受けられます。その年に初段も受けられます。その後、初段から2段を受けるのに2年、2段から3段を受けるのに3年、3段から4段を受けるのに5年、4段から5段を受けるには6年かかります。約13年かけて5段になります。これまで私は1回も外れたことはありません。更に5段から6段を受けるには7年かかります。私は今76歳ですから、受けられるのは83歳になります。到底無理だと思っていますが、私の先生は、大体40~50年やって8段になりました。8段になるため、毎年200人ぐらいの受験者がいますが、その中で4人ぐらいしか合格しない、それだけ厳しい合格率なんです。

それから、称号として錬士、教士、範士があります。6段になると錬士という称号を受けることができます。7段になると教士という称号を受けることができます。最後の範士というのは、試

験を受けるのではなく、団体から授かるもので、一番上の称号です。今は8段までしかありません。私の先生は高校生からもう50年やってます。私より年齢は1歳下なんですけど、やはりそのぐらいの年月がかかります。

また、居合というのは決まり事がうるさいんですね。1番言われるのは、目付け、吹き付け、気付けです。私の場合は所作が悪いと指導を受けることもあります。刀の抜き方は、横に抜きます。縦に抜いてはいけません。私の所持刀はいわゆる肥後物、つかはなか絞り、鞘は柳生鞘です。

時間が無くなりましたので、これで終わりますが、体の続く限り修行を続けていきたいと思っております。

ガバナー補佐スピーチ

県北第一分区 ガバナー補佐 箭内 一典 様

初めに先月の 21 日に後期委員会総会で、ガバナー補佐会議も開催されましたので、そのご報告を申し上げます。佐藤日出夫地区幹事より、地区のクラブ会員数、ロータリー財団の前期寄付額、米山奨学金の前期寄付額の実績報告がございました。

まず会員数ですが、ここでは 2 月 3 日のデータとなっております。県北第一分区のクラブ会員数は、355 名で 6 月 30 日時点の比較で 12 名増とされています。月曜日に福島西 RC で 1 名入会して 25 名となりましたので、356 名、13 名の増加でございます。この中では、福島 RC が目標の 100 名に近づいております。2530 地区全体では、会員数が 2225 名、同じく 6 月 30 日の比較で 60 名の増加となっております。前年と比較しましても、まずまずの数字ですので、うまくいけば会員数の減少に歯止めをかけることができるのではないかと考えております。

次が、各分区ごとの会員数の増減です。県北第一分区の 12 名増は、2 月 3 日時点では、相双分区の 17 名の純増に次ぐ成績となっております。クラブ別では、現時点で 4 名以上の会員増強を達成しているクラブは、富岡 RC が 8 名増で会員数 46 名、本宮 RC が 8 名増で 42 名、いわき平東 RC が 6 名増で 44 名、郡山 RC が 5 名増で 102 名、浪江 RC が 5 名増で 47 名となっております。その他 4 名増が福島 RC、喜多方 RC、原町 RC、会津若松南 RC の 4 クラブです。佐藤正道ガバナーからは、今年度初めの各クラブの増強目標の達成に向けて引き続き、尽力をお願いするようにと言われております。また、地区内には解散の話が出ているクラブもあるので、分区内に会員数の減っている小規模なクラブがあった場合は、特に注意するようにとの指示がございました。

次にロータリー財団の寄付ですが、ガバナーからの要請はご存じのように年次寄付一人あたり 150 ドル、ポリオ 30 ドル、恒久寄付（ベネファクター 1 名含めて）1000 ドルです。米山奨学金は、会員 1 人当たり普通寄付 5000 円、特別寄付 1 万円をお願いしています。県北第一分区でも、まだ送金していないクラブがあり、大体 3 分の 1 から半分ぐらいの達成状況です。そんな中で、上期集計では、福島 RC がロータリーの年次寄付金が（他のクラブと一桁違うため私は間違いかと思いましたが）2 万 2700 ドル（約 300 万円近い金額）を既に達成しております。ポリオが 3900 ドル、恒久寄付金が 1000 ドル、全て福島 RC だけが達成しております。米山奨学金も福島 RC が普通寄付 49 万円、特別寄付 20 万円で両方とも達成しているのではないかと思います。佐藤ガバナーからは、地区内全てのクラブがロータリー賞に挑戦し、目標を達成できるように勧めて欲しいとの要望がありました。

ここからは職業奉仕委員会として、参考になりそうな話をさせていただきたいと思っております。日本の総合商社の伊藤忠が、企業理念を 2020 年 4 月に「三方よし」に変えました。大変な話題でした。伊藤忠の小林 CAO は、「三方よし」はお客様のことを配慮した「誠実な商い」の一つであり、お客様の信用を得て、長い信頼関係を紡ぎながら、永続的に利益を上げ、得た利益を世間に対して還元する「三方よし」の「利益三分主義」は、現代社会における CSR やステークホルダー資本主義

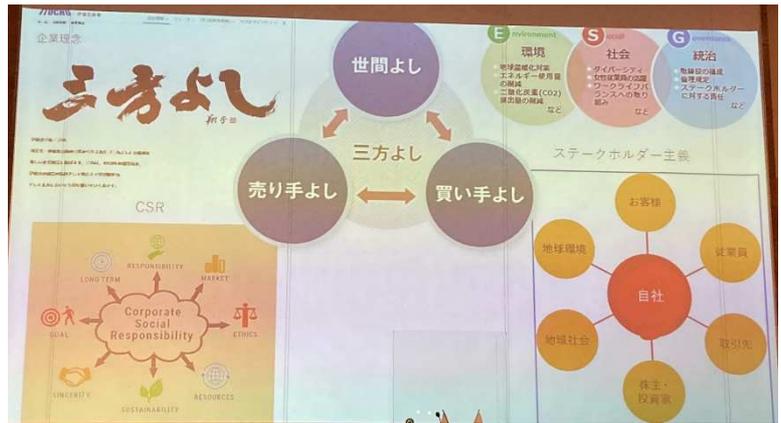


県北第一分区	2021.6/30	2022.6/30	2023.2/3	増減
福島	94	95	99	4
二本松	37	39	40	1
福島南	70	65	67	2
福島西	23	24	24	0
福島中央	50	47	48	1
二本松あだたら	35	35	35	0
福島 21	41	38	42	4
合計	350	343	355	12

2530地区全体	2216	2165	2225	60
----------	------	------	------	----

	2022.6/30	2023.2/3	増減
県北第一分区	343	355	12
県北第二分区	217	224	7
中央分区	457	461	4
県南分区	232	234	2
会津分区	301	310	9
県中分区	149	155	6
相双分区	192	209	17
いわき分区	274	277	3
合計	2165	2225	60

に近い概念でもあります。また、日本企業は欧米の株式資本主義の思想や制度を、疑問を抱くことなく取り入れてきました。企業は株主のものであり、企業は株主の利益の極大化のために行動すべきであるという考えが浸透していましたが、株主の利益の追求だけでは、企業の持続性は確保できないという認識が、機関投資家や財界のリーダーたちに広がっていった結果、CSR や ESG 投資の潮流に繋がってきました。CSR や ESG で提唱されていることは、



「株主利益の最大化を目的とするだけではなく、その他の人々の利益も拡大し、世の中の発展に寄与すべき」ということであり、これは「三方よし」の考えとも一致すると小林 CAO は述べております。また、2019年8月19日アメリカの経済団体でアップル、アマゾン、ウォールマート、JPモルガン等の CEO たちが一同に会するビジネスラウンドテーブルが、「企業の目的に関する声明」を発表しました。それは株主一辺倒の株主第一主義、株主資本主義から脱却し、株主以外のステークホルダー（顧客、社員とその家族、社会、取引先等）に対しても相応の責任を持つことを企業のミッションとするものでした。

「三方よし」の理念をもって、商いしたと言われる近江商人ですが、近江商人とは、滋賀県に本拠地を置きながら他国で商いした商人の総称です。天秤棒を担いで、一介の行商人から豪商へと成長していった近江商人たちも、地域毎に活躍した場所で呼び方が異なり、高島商人、八幡商人、日野商人、湖東の五個荘商人に大きく分かれています。右側の日本地図の赤い点は、江戸時代から明治の初期にかけて、近江商人が出た地です。県北では福島市と須賀川市になっています。

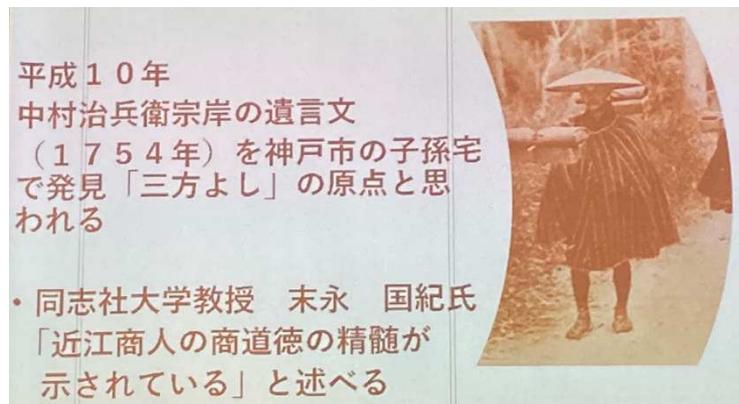


「三方よし」の原点となる家訓を託した五個荘商人、中村治兵衛家が本家であり、百貨店中合を創業した中村治朗兵衛家に繋がっていると思われます。瀬上の大宮内池家については、何人かの大学の先生が、詳しく調べておられますが、ここでちょっと触れさせていただきます。この中に内池家と関係ある方がいらっしゃるかもしれませんが…。

内池家では日野蒲生氏郷の家臣、内池備後之守の一族で、初代宗十郎は安土城下に居住、八幡山築城とともに移転し、本町3丁目、京街道沿いに住居を構えました。3代浄清の代に出羽の国に出店し、4代浄薫の代に明暦元年（1855年）に瀬上に出店し、5代徳次の代に兄弟の宗感が福島に出店したそうです。出店当初は酒造、醤油、茶の他に呉服、太物と言われる優衣の織物や麻織物などを扱っており、1687年には、福島十万石堀田家の御用商人になっています。その後衰退したようですが、8代宗十郎永年は瀬上近江屋を再興し、足守藩の御用商人になるなど。実業家の手腕を發揮しまして、天保期には本家田畑持ち高百石以上とされています。福島の豪商、内池三十郎家も宗十郎の一族です。三十郎とは、多分内池醸造さんのことだと思いますけど、8代宗十郎永年は隠居後、国学者本居大平の門下となって、瀬上、桑折を中心とした古学、歌道の結社「みちのく社中」を主宰し、多数の著書が残されています。中でも、永俊が1838年の76歳に残した家訓55カ条は、行商人の規範としてよく知られ、家訓というよりは人の道を教える内容とも受け取れます。商人としての心得としても多く網羅しています。本家・分家の結束を重視して、それぞれの収支決算を明らかにし、緊密な関係に合わせて競争心を持たせています。さらに、後継ぎについては、実力

のない長男よりもできる次男や三男を選ぶようです。また、養子の場合は、家門の中から入れるようにすると記してあります。近江商人が行商先で転居し、創業もしくはその子孫が創業した会社です。西部、高島屋、イオン、伊藤忠、住友など、日本を代表する錚々たる会社が並んでおります。中合さんは残念がらなくなってしまうましたが…。

1890年に岩手の氏族である井上正智が著書、「近江商人列伝」で、中村治兵衛宗岸の遺言文を紹介しましたが、長らくその原点は不明でした。平成10年に神戸市の中村治兵衛の子孫宅で、治兵衛宗岸が1754年に書いた遺言文が発見されて、同志社大学教授、末永国紀氏が、「近江商人の商道德の精髓が示されている」と述べ、「三方よし」の原点であると検証されました。この中村治兵衛宗岸は明治7年、福島市荒町に中合を創業した3代目



中村治兵衛(安藤芳兵衛)の本家筋にあたります。「三方よし」の原点と言われた宗岸の家訓の一部を紹介します。「たとえ他国に出かけても、自分が持参した商品はその土地の人が気持ちよく着用できるように心がけ、自分のことばかりを思うのではなく、まず顧客のためを思って、一挙に高利を望まず、何事も天の恵み次第であると、検挙に身を処し、ひたすら行商先の人々のことを大切に思って商売をしなければならぬ。そうすれば、天道に叶い、心身ともに健康に暮らすことができる。自分の心に悪い心が生じないように、神仏への信心を忘れないこと、地方へ行商に出かける時は、以上のような心構えが一番大事なことである。」と書いてあります。また、面白いのが、中村家の家訓を駅伝のように代々バトンタッチするための追い書きが第3条です。藤橋さんの事業は138年と素晴らしいお話がありましたけど…。第3条では、「自分の心がけ1つで身代は良くなるものであり、自分の一生はその身代を我が子に渡すまでのたった30年である。親から譲られた財産を大切に、自分の子供たちに無事に渡すべきものである。自分は、たった30年間の手代や番頭をやって家業に努め、財産を大切すべきである。」と記されております。この条文は、奉公人、奉仕の考え方を示しています。家名や家業という財産は預かったものとして、当主自ら懸命に働き、事業を発展させて、次の世代へ繋いでいくことが大切という強い決意を感じさせます。石川県に718年に建てられた法師旅館の第46代当主である法師善五郎は、「施設経営は駅伝のようなもので、永遠に続いていくタスキを渡すために、経営者は一途に走るのです。その横を家族や従業員、お客様、そして地域の方々が伴走し、応援してしてくれることを忘れずに感謝しなければなりません。」と話しています。1300年近く続く老舗の当主も家名や家業を継ぐために、強い思いで経営に取り組んでいるのです。

近江商人の経営理念とありますが、多くの近江商人が子孫のために書き置きを残しており、その代表的なものを紹介します。近江商人の行商は、遠い他国で商売をし、その地で開店することを本務としているため、他国の人の信頼を得ることが何よりも大事であり、その心構えが記してあります。中村治兵衛の書き置きに見られる「売り手よし、買い手よし、世間よしの三方よし」が他国での行商の心得えになったとされています。

また、「陰徳善司」について。見返りを期待せず、人に知られないように密かに善行を施すこと。近江商人は、社会事業に多額の寄付をしたことは何度もあり、特に「陰徳善司」は近江商人の経営理念としてよく知られております。日本有数の豪商となった治兵衛は、始末とケチの違いを心得ていなければダメである。正当な利益を社会奉仕のために散在する「陰徳善司」は、結果として生きた金を使うという意味では、始末に準じることであり、守銭奴のように目先の損得に捕らわれ、出し惜しみしてはならない。「始末」とは、物を無駄にしないように儉約するという、つまり、日用品の紙きれ1枚まで大切に使い、また、時間の浪費を嫌う心情です。そして「きばる」とは、元気で勤勉に働くということです。

近江商人は単に商売熱心というだけではなく、信仰心も厚かった。近江国内では延暦寺や三井

寺、日吉大社などの大きな寺社があり、近江商人は共通して熱い信仰心は、営業を基とする行商人にとっては、謙虚を促し悪い心を抑える規範となったことによって、家業永続の祈りにも結びついてきたと言われていています。初代、伊藤忠兵衛（伊藤忠商事の創始者）の言葉は「商いは菩薩の業、商売道の尊さとは、売り買いのいずれに対しても益し、世の中の不足をうずめ、御仏に叶うもの」、「利心於金（努めて得るのは誠の利なり）」という言葉を残しております。五個荘の豪商 松屋久衛門は、「納品、商品をお届けするのは、仏の意思によって自分が代行しているのだから、暴利をむさぼったり、質の悪い商品を良い商品と偽って売ることにはできない。」との理念を持ち、自分の自画像に「奢れるものは久しからず」と自書したと言われております。

長井市が発行した「長浜の創業者たち」という書に、安藤興惣次郎のことが記載されております。福島県福島市に長浜商人、安藤興惣次郎が興した中合百貨店があります。その創業は 1830 年（天保元年）にさかのぼり、2 代目中村治郎兵衛が東北地方で商いはじめ、安藤興惣次郎は、その 4 代目にあたります。2 代目中村治郎兵衛が近江の国神崎郡南五個荘出身であり、天保の頃から東北地方での行商を行うようになりました。天秤棒を担いで、得意先開拓に血のにじむような努力をした結果、山形の米沢、福島の若松と二本松に商圏としての基盤を固めました。明治 7 年に福島に定住し、荒町に中村呉服店を創業したのは、3 代目中村治郎兵衛です。ここには書いてありませんが、福島で初めて掛け値なしの正札販売をしたそうです。この時、「中村呉服店は 安心して買える確実な商品を売る店だ」との評価を頂いたそうです。また、明治 17 日には東京の日本橋に店舗を構え、卸売りを始めております。明治 26 年に店を会社組織として「中村合名会社」としましたが、世間では中村の「中」の字と合名の「合」の字を取って、「中合」と呼んでいたため、1935 年（昭和 10 年）に株式会社となった際に、社名を「中合」と改めました。この頃が 4 代目となる安藤興惣次郎の代で、彼は長浜の安藤家に養子に入りました。それ以前にも中村家から安藤家に縁組があるなど、両家は深い絆で結ばれていたといえます。安藤興惣次郎の子、安藤順三も戦後、中合の社長を務めました。

安藤家の先祖は、豊臣秀吉が長浜城主であった頃、長浜の有力者「十人衆」の一人、安藤九郎左衛門です。秀吉は長浜の城下町 49 町を 10 組に分け、各組に 1 人ずつ町年寄を置いたといわれ、安藤興惣次郎もその 1 人として調整に携わりました。現在も北国街道沿いには 1905 年に建てられた安藤家の屋敷が残っており、内部が一般公開されています。長浜を代表する和風建築で、屋敷内には、陶芸家 北大路魯山人が長浜に滞在した際に内装を手がけた離れ座敷「小蘭亭」や中村合名会社の豪刻看板、庭師 布施宇吉による風情ある日本庭園などを見られます。安藤興惣次郎は、大正 7 年に、現在プライム市場に上場している日東紡の前身である福島精練製紙株式会社を設立しております。資本金 50 万円、本社と工場を福島市に置き、支社長が安二郎、専務が横田坂次郎となっております。大正 8 年に福島紡績株式会社とあるため、織物業務を始めましたが、しかし、残念ながら大正 9 年に第 1 次世界大戦後の不況が起りまして、本体の中合も危ないということで、福島紡績の社長を、長野県の財閥 片倉タ夫に変わっております。その後、大正 12 年には福島紡績の名前を現在の日東紡変えております。この時も安藤興惣次郎は非常勤取締役として残っております。

時間となりましたので、以上で終わります。

以上



長浜市 安藤家の庭園と魯山人が彫った看板

創業時の福島市 荒町の中合